

三島由紀夫『豊饒の海』論

——本多繁邦の「理智」と「情熱」——

中 尾 莉 奈

一 はじめに

三島由紀夫の長編小説『豊饒の海』は、文芸雑誌「新潮」に連載された。その連載期間は、一九六五（昭和四〇）年九月号から「春の雪」の連載が開始され、一九七一（昭和四六）年一月号に「天人五衰」が連載を終了するまでの約五年半であった。この長編小説に唯一全編を通して登場するのが、「春の雪」で松枝清顕の友人として登場した本多繁邦である。松枝清顕の転生者であるとされるものたちが次々と登場する中で、本多のみが年を重ね、巻を追うごとにその重要度を増していく。本稿では、『豊饒の海』全巻を通して登場する本多繁邦が、「春の雪」から「奔馬」にかけてどのように変化したのか論じていく。ここでの変化とは、「奔馬」の冒頭では「論理の世界」に属する本多の特徴とも言える「理智」という性質が「春の雪」「奔馬」を通してどのように変化したかというものである。本多の変容の過程を考察することで、本多の築いた「論理の世界」及び、その源である「理智」について明らかにすると共に、その変化の要因と意味を考察したい。

二 「論理の世界」

「奔馬」の冒頭で登場する本多は、清顕の死後、道を外れること無く裁判官として出世していることが窺える。そしてこの本多は、先に挙げた「論理の世界」に属している。これについて、吉田達志氏は、『三島由紀夫の作品世界―『金閣寺』と『豊饒の海』―』において次のように述べている。

本多は、既にはっきりと「論理の世界」に属しており、彼にとってそれだけが、夢や現実よりも確かなものであった。^(注1)

吉田氏の言う「論理の世界」に属している期間とは、「春の雪」清顕死後から「奔馬」勲に出会うまでの十八年間のことである。この間に、本多は東京帝国大学法学科へ進み、司法試験合格後は司法官試験を経て判事となった。「奔馬」の冒頭で三十八歳である本多は、控訴院の左陪席になり大阪に住んでいる。空白の時間に、理性的であることを常に求められる判事という立場で着実にその階梯を歩んでいることが窺える。長い年月をかけて培われてきた「理智」は、本多を「理智」の権化のような人間にしていた。では、「論理の世界」とは、どのような世界で、どうして出来上がったのか。つづいて、「奔馬」内の本多の語りから「論理の世界」について読み解いていくことにする。「奔馬」の本多は「はつきりと論理の世界に属していた」（「奔馬」第二章）という。しかし、「暁の寺」では、その世界が崩壊してしまっている。元々本多が住んでいた「論理の世界」とは、どのような世界なのか、そして、その世界が崩壊する際に消失した「理智」とは何を抛り所としているものなのか。ここからは、確固たる地位と共に「論理の世

界」に住む本多について整理していきたい。そもそも、本多自身は、「奔馬」の冒頭時の状況を次のように捉えている。

つらつら思へば、遠くで銀の堆積が鏘然と崩れるやうに、自分の裡の遠くでかつて危険が崩れて、それ以来、どんな魅惑にも耳を貸さない鉄壁の自由が備わつてきたやうに思はれた。その、遠くで鏘然と崩れ去つた危険とは清頭だつた。その魅惑とは清頭だつた。（「奔馬」第二章）

「論理の世界」とは、「どんな魅惑にも耳を貸さない鉄壁の自由」という、何にも脅かされない世界のことだ。この世界を支えているのが「理智」である。「理智」的な人間として成長した結果、本多は「論理の世界」に属するようになったということだ。しかし、その世界を脅かすものが存在する。それが清頭であつた。清頭のみが本多を「論理の世界」から引きずり出すことができるのだ。唯一「論理の世界」を脅かす存在である清頭が消えて以降、本多は「論理の世界」に存在するようになったのである。言い換えれば、清頭が存在している時には、本多は「論理の世界」に属することが出来ないということだ。つまり、清頭が存在する「春の雪」では、本多は「論理の世界」に属していないのだ。

では、「春の雪」の本多は、どうなのか。清頭と別れ三十八歳になった「奔馬」の本多と、清頭の存在する時の本多にどのような違いがあるかを整理しておきたい。

三 本多の「理智」と「情熱」

先に、清頭が存在する場合、本多は「論理の世界」に属することが出来ないと結論づけたが、それだけではまだ条件として不十分である。何故なら、「春の雪」においても、本多が「理智」的である様子が描かれているからである。

その年齢にしてはめづらしい本多の、もの静かな、温和な、理智的な性格にだけ心を惹かれた。（「春の雪」第二章）。

「春の雪」の本多を、清頭はこう評している。このことから、本多は、同年代の青年たちと比べ、落ち着きのある「理智」的な人物であることが窺える。また、本多自身は次のように自身を評している。

友情を取引にした情ない対峙において、はじめて清頭は懇願者になり、本多は審美的な見物人になる。（「春の雪」第四章）

このように、本多は、「見物人」という清頭を傍から見ると冷静な立場を取っている。二人の間にある友情は、「理智」的な本多だからこそ結ばれているのだ。また、清頭が月修寺へ聡子に会いに行つた際に熱を出した場面では、本多は次のように描かれている。

本多は往きの車中でも試験勉強に精を出し、ここへ来て夜を徹しての看病のあひだも、論理学のノオトをかたはらにひろげてゐた。

ランプの黄いろい霧のやうな光輪の中に、二人の若者の心に抱かれた二つの対蹠的な世界の影が、鋭くその先端をあらはしてゐた。一人は恋に病み、一人は堅固な現実のために学んでゐた。清頭は夢うつつに、混沌とした恋の海を海藻に足をからめ取られながら泳いでをり、本多は地上に確乎と建てられた整然たる理智の建造物を夢みてゐた。（「春の雪」第五十三章）

意識の無い清頭を前に、本多は「理智」的な態度で勉学に勤しんでいる。つまり、ただ清頭が存在することで本多が「理智」を手放し「論理の世界」に属することが出来なくなるということでは無いということだ。更に、「奔馬」において、本多が清頭と過していた時の自身について語っている。

当時の私は、自分が社会のために有効な、有為な人間になれると信じてゐましたし、その年齢にしては感情も平衡を保ち、理智も平板なりに一応澄んでゐました。

（中略）

しかし、御父上ともお話しした親友の松枝清頭といふ男が、さういふ私の、きちんと整つた認識を乱してしまつたのです。

（中略）

人間の変貌の奇蹟を、一旦かうして目のあたりにした以上、私自身も多少変わらざるをえませんでした。（「奔

馬」第十章)

「理智」の人であつた本多が、清頭と過すことで変化したことが窺える。では、他の条件とは何か。それを明らかにする為に、「理智」的では無い本多について整理していく。

日ごろの本多にも似合はぬことだが、彼はこの愚物を前に、いかにもおづおづといつはりの告白をすることに喜びを感じた。嘘をつくことから言葉が淀みがちになるのを、思ひつめた気持ちと羞恥からさうなるのだと、信じ込んでゐる相手の顔つきが面白かつた。理智があれば人を信服させるのが難しいのに、いつはりの情熱でさへ、情熱がかうもやすやすと人を信じさせるのを、本多は一種苦々しい喜びで眺めた。(「春の雪」第三十四章)

引用箇所は、清頭と聡子の秘密の逢瀬を手助けする為に本多が奮闘する場面である。この時の本多に、先に引用したような「理智」的な様子は無い。目的を達成する為、清頭の為に「いつはりの告白」をするのである。それは、「日ごろの本多にも似合わぬこと」であつた。また、熱に浮かされる清頭の前では「理智」的であつた本多であつたが、目を覚ました清頭の眼差しを受けて態度が変化する。

清頭は床の中から潤んだ目をあげた。枕に頭を委ねたまま、ただたのむ眼差しになつてゐるのが、本多の心を刺した。本多はそのときまで、寺には一応当たつてみるだけにして、重症の清頭を一刻も早く東京へ連れ戻るといふ気持ちに傾いてゐたのであるが、その目を見てから、どうしても自分の力で清頭を聡子に会わせてやらねばな

らないと思ふやうになつた。（「春の雪」第五十四章）

このように、清頭の為に行動を起こす時、本多は「理智」的であることをやめるのである。しかし、本多がこれらの行動を起こす時の清頭もまた、変化している。

自分を愛してくれる人間を軽んじ、軽んじるばかりか冷酷に扱ふ清頭のよくない傾向（「春の雪」第三章）

このように、清頭は周りを冷淡に見る青年であつた。ところが、本多が「日ごろの本多にも似合ふこと」をした時の清頭は、清頭を愛する聡子を「冷酷に扱う」どころか、彼女との関係を深めようとしている。この時の清頭は、殿下との婚姻が決まった聡子と関係を持つようになるという「至高の禁」を犯す「新たな人間」（「春の雪」第二十五章）となつていた。

このように、「至高の禁」を犯すほど運命に翻弄される清頭の為に行動を起こす時のみ、本多は「理智」とは違う「いつはりの情熱」を宿すのだ。「春の雪」で主人公である清頭の友人として過した本多は、運命に翻弄される清頭の隣で、その熱に当てられたかのように、当初の本多らしからぬ行動をとる。その思考、行動までもが清頭によって支配されているのである。言うなれば、本多の「理智」の有無は、清頭に関わる行為か否かということだ。それは、清頭の為に行動を起こす時に「理智」的でないこと、その行動には「いつはりの情熱」が宿っていることから窺える。これが、「論理の世界」に属することが出来る具体的な条件である。「論理の世界」に属するには、本多が、情熱を燃やす清頭の為に行動することが出来ない状況でなくてはならない。清頭の死によって、この条件が満たされ、本多は、

「理智」の人として人生を歩み、「奔馬」へと繋がるのである。

「春の雪」の本多の「理智」の変化について確認したところで、より強固な「論理の世界」に居る本多が、「奔馬」でどのように変化するのかを整理していく。

再三述べているが、「奔馬」の本多は、裁判官として「論理の世界」に属している。

つらつら思へば、遠くで銀の堆積が鏘然と崩れるやうに、自分の裡の遠くでかつて危険が崩れて、それ以来、どんな魅惑にも耳を貸さない鉄壁の自由が備わつてきたやうに思はれた。その、遠くで鏘然と崩れ去つた危険とは清頭だつた。その魅惑とは清頭だつた。（「奔馬」第二章）

このように、情熱を燃やす清頭が存在しない「奔馬」では、強固な「理智」が脅かされることは無い。しかし、清頭とは違う例外が現れる。飯沼勲である。

疾走する自動車の砂塵の中に取り残された若者は、顔つきも肌の色もまるでちがつてゐるのに、その存在の形そのものが正しく清頭その人だつた。（「奔馬」第六章）

本多を「論理の世界」から引きずり出す唯一の例外であつた清頭と「存在の形そのもの」が同じ清頭の転生者・勲の出現により、本多は「理性」を欠くことになる。

本多はかつて清頭とすごした日々を想ひ、なつかしさと悲しみに入りまじつて、又、不測の希望を感じた。こんな心のをのきを手に入れたからには、今まで自分の理性に縛^{いまだ}められてゐた確信を、のこらず擲つても悔いない心地がした。（「奔馬」第六章）

滝を浴びる勲に三つの黒子があることを見つけた本多は、清頭の最後の言葉である「又、会うぜ。きつと会う。滝の下で」（「春の雪」第五十四章）を思い出す。そして、勲を「正しく清頭その人だつた」（「奔馬」第六章）と確信し、先に引用したように「今まで自分の理性に縛められてゐた確信を、のこらず擲つても悔いない」と考える。長い年月をかけて培われた「理智」が、転生者・勲の前に消失した。ただ存在するだけでは本多から「理性」を奪うことは無かつた清頭に比べて、勲は存在そのもので本多から「理性」を奪つた。それほどまでに、本多にとっては勲の存在は強力であり、圧倒的なものである。その圧倒的な存在感を放つ勲を、本多は判事として法廷で人々を理性的に観察する時とは違い、転生者という何の根拠も無い相手をそれと信じて盲目的に観察するのである。転生者の観察者という役割を、本多は何の抵抗もなく自身の生業にしたと言える。何故、本多は何の抵抗もなく受け入れたのだろうか。

本多ははふと、よみがへつたのは清頭だけではなかつたのではないかといふ想ひにとらはれた。もしかすると、よみがへつたのは本多自身であつたのかもしれないのだ。（「奔馬」第六章）

「鉄壁の自由」が崩壊した本多は、「春の雪」の清頭と過していた頃の本多として「よみがへつた」のである。ただ清頭の転生者である勲が現れただけでなく、本多自身も一瞬にして清頭と共にいた時の本多が「よみがへつた」から

こそ、清頭の転生者・勲を受け入れたのだ。そうして、勲は、本多を再び彼らしくもない行動に駆り立てる存在となった。しかし、勲に出会ってから、本多は「理智」の人である。

本多の理性の礎は崩れかけてゐたが、日々の思考の習慣は渝らなかつた。（「奔馬」第十九章）

あくまで、「崩れかけてゐた」のであつて、完全に崩壊した訳ではないということだ。しかし、勲を転生者と認めた時の本多は完全に「理性」を欠いていた。この齟齬の原因は何か。

理性の礎にはたしかに亀裂が入られたが、又たちまち土がその亀裂を埋め、旺んな夏草がそこに生ひ立つて、あの一夜の記憶を隠し了てしまつた。今、ここに見てゐる能のやうに、あれは自分の理性を訪れた幻であり、理性のたまさかの休暇だつたのだ。（「奔馬」第十九章）

勲を前にして一度は「理性」を欠いてしまつた本多であつたが、勲と会わない間に再度修復したと言える。転生者の存在を認めるという凡そ「理智」的とは言えない考えを持ちながら、未だ「理智」の権化として本多は存在しているのだ。ところが、東京出張の後、本多は人が変わってしまう。

現実が確乎たる外見を失つて、その現実の出来事を縦横に載いていく職務が、俄に手ごたへをなくしたのである。物思ひに耽ることが多くなり、同僚の話しかける声を耳に逸して、返事をしないことがよくあつた。（「奔馬」第

二十五章

このように、勲との出会いは、それまでの本多を作り替えてしまうものであった。そして、「理智の軌道を逸して、何かの感情の草深い小径に踏迷つて」（「奔馬」第三十一章）しまった本多は、「理性を職業とする世界」（「奔馬」第三十一章）から見放されていく。その最も大きな影響が、本多の弁護士への転身である。「論理の世界」に住み「鉄壁の自由」を有する本多であれば、立場を顧みずに勲の弁護の為に弁護士になるなどという行動を取る筈は無い。何故なら、「論理の世界」とは、非理性的な行動とは相容れないからである。しかし本多は、勲を転生者と認めたことを「すこぶる軽率」（「奔馬」第十九章）と理解しながらも、そのことを重要視しない。

その理性の根拠に何か怪しげなものがあることは、今更点検せずともよいのである。それはそれで放置しておくばよいのである。（「奔馬」第十九章）

このように、自身の「理性」の軸がぶれていることに目をつぶった。これこそ「論理の世界」が壊れる予兆である。「理智」の人である本多であったが、この変化を肯定的に捉えている。

本多は自分の生涯のうちで、自ら選んだこれほど大きな放棄を、二度とくりかへすことはあるまいと思ふにつけ、今身内に湧き立つてゐる奇妙な情熱を、よくよく心に刻んでおかうと考へた。万人が愚かだと思ふ決断を自分にしたあとの、この心身の爽快、この胸裡の温もりを何にたとへよう。それも分別ざかりの今日になつて！

勲に感謝されるべきではなく、むしろ勲に感謝すべきである。勲の転生と勲の行為に触発されなかつたら、本多はいつか氷山に棲むことに喜びを感じる人になつてゐたかもしれない。彼が安穩と考へてゐたものは氷だつたのだ。完成と考へてゐたものは涸死だつたのだ。自分が何か他の考へ方をすることもできるといふことに未熟をしか見てゐなかつたとき、彼は本当の成熟の意味すら知らなかつたのだ。（「奔馬」第三十一章）

この場面で、本多が「奇妙な情熱」によつて勲を救うことを決めるのである。「論理の世界」の崩壊を積極的に肯定した本多は、そのことに快感を覚えてゐる。そして、本多の内面に留められていた予兆は、他者から見て取れるようになり、最後には弁護士になるといふ形に現れた。これは、「情熱」を燃やす勲によつて「理智」を放棄し、その代わりに「情熱」を得たといふことだ。清顕によつて宿された「いつはりの情熱」ではなく、ここで本多が得た「情熱」は、「奇妙な」とはつくものの、「身内に湧き立つてゐる奇妙な情熱」といふ、本多の中から湧き立つものである。勲は、本多に「いつはりの情熱」では無く本物の「情熱」を与えたのである。

本多の宿した「情熱」は、「春の雪」と「奔馬」では違ふとしたが、その発露には、共通したものがある。それが、弁護士という肩書きである。「奔馬」では実際に弁護士として立ち回る本多であるが、「春の雪」においても、弁護士のように立ち回っている。つづいて、「春の雪」で本多が弁護士という言葉を用いる箇所について引用する。

本多は法廷に臨む若い弁護士はかうもあらうかといふ気持ちになつた。裁判官の気持ちなどには斟酌なく、ただ主張し、ただ弁護し、ただ身内の明かしを立ててやらねばならぬ。

（中略）

本多の言葉も熱し体も熱して、うすら寒い寺の一間にゐながら、彼は自分の耳朶が火を発して、頭が燃え立つやうに感じてゐた。（『春の雪』第五十四章）

本多が病に倒れている清頭と聡子をもう一度合わせようと門跡に言いつのる場面で、ただ一身に清頭の為に言葉を尽くす本多は、「理智」の欠片もない。どこか引いて見ている「見物人」ではなく、「情熱」を宿した青年である。清頭の味方である弁護人としてそこに居るのである。続いて、「奔馬」で実際に弁護士となった本多を見ていく。

自分が今、裁判官の時には思ひもよらなかつた危険な賭をしようとしてゐるのを本多は知つた。（『奔馬』第十二章）

桐院宮治典王殿下と対した本多は、ここで、「論理の世界」のもとではすることの無かつた、危険な賭をする。

宮が先程勲を救はうと思つておられた方向とはまるで反対の方向から、却つて一そう有効に、しかも今度は勲を救おうなどといふお気持ちを一切持たれず、この上なく円滑に、宮がさうされる方途が残つてゐるのだ。今の本多を措いて、宮のさういう御決意を促す者も、その機会もないとすれば、畏れながら、本多がそれを巧みにすすめるに如くはなかつた。（『奔馬』第三十二章）

このように、勲を救う為に桐院宮治典王殿下すらも利用しようとするというのである。皇族を利用するなどという

無礼をはたらいてでも、本多は勲を救おうとするという傲慢さをあらわした。

以上のように、当初の本多では考えられないような考えや行動をとっていることがわかる。清頭、勲、二人の影響を受けた本多は、「理智」ではなく「情熱」によって動いているのである。そして、ここで本多が宿す「情熱」は、清頭と勲を救う原動力となる。それは、「理智」の人としての本多の崩壊であり、清頭及びその転生者の影響力の強さの象徴でもある。そして、その強さにより、本多は二人の救い手として立ち回るのである。

四 清頭と勲

ここまで、本多が「理智」「理性」を捨て、「情熱」を宿したとしてきたが、その原因である清頭と勲は、どのような人物なのか。二人について、田中美代子氏は『豊饒の海論』で次のように述べている。

一卷『春の雪』の主人公松枝清頭は「たをやめぶり」で美と優雅の極致を、二巻『奔馬』の飯沼勲は「ますらをぶり」で剛毅と義烈とを象徴しつつ、それぞれ相反する二つの生を極限的に生きることになる。しかし二人は又同時に彼らの生に立ち会う理性の人本多繁邦によって夢みられた、彼岸の英雄である。^{注2}

このように、二人に性格や姿かたちなど目に見える部分に共通するものは無い。しかし、種類が違うものの、共に本多に「情熱」を与えた二人には、本多の「彼岸の英雄」であるという共通点が存在する。では、この二人が本多に「いつはりの情熱」「奇妙な情熱」という種類の違う情熱を与えるに至った差異とは何か。そこで、本多が二人につい

て言及している箇所を整理していく。

まず、清顕について。「奔馬」と比べ、「春の雪」は本多が主体となって語る箇所は少ない。その少ない中で、本多は、自身が清顕のことをどのように見ているかを語っている。

本多は常に似ぬ曖昧な、熱に浮かされたやうな言葉を並べながら、清顕が禁を犯し法を超えるのを、讃嘆の気持ちのままじへて眺めてゐる自分におどろいた。法の側に属する人間になることを、夙うから心に決めた自分であるのに。（「春の雪」第二十八章）

勅許の下りた聡子との恋という禁忌を犯そうとする清顕を、本多は「讃嘆の気持ちのままじへて眺めてゐる」というのである。「理智」「理性」の人である本多が、その二つとは縁遠い行動を取る清顕を好意的に受け止めている。そして、そんな清顕について更に言及している。

本多は自分の理性がいつもそのやうな光りであることを望んだが、熱い闇にいつも惹かれがちな心性をも、捨てることはできなかった。しかしその熱い闇はただ魅惑だった。他の何ものでもない、魅惑だった。清顕も魅惑だった。そしてこの生を奥底のほうからゆるがす魅惑は、実は必ず、生ではなく、運命につながつてゐた。（「春の雪」第二十九章）

「奔馬」の第三章においても言及されているが、本多にとって、清顕は「魅惑」であった。そして、清顕を「魅

惑」たらしめるのは、「熱い闇」であつた。では、この「熱い闇」とは何か。それこそ、「至高の禁」を犯す「新たな人間」が放つものであり、清頭が聡子への恋によつて燃やす「恋の情熱」（「奔馬」第三十七章）である。そして、「魅惑」は「運命」へと繋がっているのである。引用箇所理論で考えれば、「運命」に繋がるといふことは、「生」とは繋がらないということだ。そして、「運命」へと繋がった清頭が死へと進んでいくのは当然であり、「運命」へと繋がらない本多が「生」へと進んでいくのもまた当然である。そのことが本多にとつて「魅惑」なのである。

一方、勲はどうか。勲もまた、「運命」に選ばれた人間である。その「運命」とは、清頭の転生者というものである。では、勲が持つ「運命」へと繋がる「魅惑」とは何か。

君の奉納試合に見たほとんど崇高な力と、君の純粹さと情熱とには、讃嘆を惜しみません（「奔馬」第十章）

本多は、清頭が「禁を犯し法を超える」様と同様に、勲が持つ「純粹さ」と「情熱」にも「讃嘆」の気持ちを持っている。この二つこそ、本多が勲に感じる「魅惑」である。では、勲の「純粹さ」とは何に起因しているのか。ここで、勲が考える「純粹」について引用する。

純粹とは、花のやうな観念、薄荷をよく利かした含嗽薬の味のやうな観念、やさしい母の胸にすがりつくやうな観念を、ただちに、血の観念、不正を薙ぎ倒す刀の観念、袈裟がけに斬り下げると同時に飛び散る血しぶきの観念、あるひは切腹の観念に結びつけるものだった。『花と散る』といふときに、血みどろの屍体はたちまち匂ひやかな桜の花に化した。純粹とは、正反対の観念のほしいままな転換だつた。だから、純粹は詩なのである。

〔「奔馬」第十章〕

勲の考える「純粹」とは、「正反対の觀念のほしいままな轉換」という觀念を捻じ曲げることの出来るものである。これについて、田坂昂氏は『三島由紀夫人門』で次のように言及している。

「血」と「花」——「血みどろの屍体」と「匂ひやかな桜の花」——という相反する觀念の結合、あるいは互換轉換といふことのなかに「純粹」という觀念をみているわけであるが、それは「血」と「花」の或る種の共通性を示そうとしているということである。^(注3)

相反することがらに共通性を生んでしまう勲の「純粹」は、「血みどろの屍体はたちまち匂ひやかな桜の花に化」してしまふ。そうして捻じ曲げることで、勲の「純粹さ」は特殊なかたちを露わしていく。

思へば蔵原をよく知らぬといふことこそ、勲の行為を正義に近づけるものだつた。蔵原はなるたけ遠い抽象的な悪であるべきだつた。恩顧や私怨はおろか、その生の人間に対する愛憎すら稀薄なところに、はじめて殺人が正義になる根拠があつた。（「奔馬」第二十一章）

勲の「純粹さ」は、「殺人が正義になる根拠」すら作り出すのである。言い換えれば、「殺人」という悪をも正義に捻じ曲げてしまふということだ。

悪で正義を稀め、正義で悪を稀めるやり方をしてはならない。自分が自分の体内にひそかに貯はへたいと思ふ悪は、正義が純粹であると同じ度合いに、純粹でなければならない。（『奔馬』第二十三章）

悪と正義とが等しく「純粹」でなくてはならないということは、正義同様に悪もまた「純粹」であるということである。悪も正義も「純粹」なものと捉えられる「純粹さ」こそ、勲の「魅惑」である。

では、勲の「情熱」とは何か。清顕は「恋の情熱」であったが、勲は恋に「情熱」を燃やしてはいない。勲の「情熱」を探る為に、勲の行動の指針である「忠義」について整理しておきたい。

「はい。忠義とは、私には、自分の手が火傷するほど熱い飯を握つて、ただ陛下に差上げたい一心で握り飯を作つて、御前に捧げることだと思ひます。その結果、もし陛下が御空腹でなく、すげなくお返しになつたり、あるひは、『こんな不味いものを喰へるか』仰言つて、こちらの顔へ握り飯をぶつけられるやうなことがあつた場合も、顔に飯粒をつけたまま退下して、ありがたくだちに腹を切らねばなりません。又もし、陛下が御空腹であつて、よろこんでその握り飯を召し上がつても、直ちに退つて、ありがたく腹を切らねばなりません。何故なら、草莽の手を以て直に握つた飯を、大御食として奉つた罪は万死に値ひするからです。では、握り飯を作つて献上せずに、そのまま自分の手もとに置いたらどうなりませうか。飯はやがて腐るに決まつてゐます。これも忠義ではありませうが、私はこれを勇なき忠義と呼びます。勇氣ある忠義とは、死をかへりみず、その一心に作つた握り飯を献上することでありませう」（『奔馬』第十七章）

勲にとって「忠義」とは、「いつでも罪となることを覚悟せねば」ならない行動を言うのである。罪を犯すという悪もまた、勲には「忠義」なのだ。この勲が考える「勇気ある忠義」について、吉田達志氏は次のように説明している。

勇気ある忠義とは、民衆が己の判断に基づいて誠意と見なすものを、天皇の命令なしに天皇に対して、一方的に行うことであり、その点で天皇の命令に従って死ぬのを忠義と見なす、軍人の忠義とは異なる。^(注4)

「勇気ある忠義」とは、「己の判断」によって見出すものであり、その方法は個々人で異なるものだということだ。「一方的」なそれは、一見すると悪にも見えるが、行為者が最良の忠義を見せたからこそのものである。そして、その後直ちに腹を切るまでが勲の「忠義」であった。この勲の「忠義」を、本多は「忠義の情熱」(『奔馬』第三十七章)と評している。つまり、勲の「忠義」こそ、本多が「魅惑」と感じる「情熱」なのである。

以上のように、本多が清頭に感じる「魅惑」は「運命」であり、「恋の情熱」であった。一方、本多が勲に感じる「魅惑」とは、「純粹さ」とそれ故に燃やす「忠義の情熱」のことである。それらは「運命」へと繋がる「魅惑」であり、本多に「情熱」を宿すことになった要因と言える。

五 最後 に

本多繁邦は、「理智」「理性」の人である。それは、「春の雪」「奔馬」のみならず、『豊饒の海』全体における大前

提である。だからこそ、本多は清頭及び彼の転生者たる飯沼勲、ジン・ジャン、安永透の観察者として存在することが出来るのである。しかし、彼らと関わっていくことで、本多は「理智」「理性」のみに支配される観察者という立場から度々逸脱していく。それが、「春の雪」で清頭の為に起こす行為の時に見せた当初の本多らしからぬ行動として表れた。ところが、一旦は観察者から清頭の為に奔走する〈救い手〉のように立ち回った本多であったが、その熱も清頭と別れることで現れなくなつた。しかし、清頭の転生者と定めた勲と出会うことで、本多は再び当初の本多らしからぬ行動、他者を助ける〈救い手〉としての行動をとるようになる。裁判官として築き上げて来た「理智」「理性」を放棄するのである。

「理智」とは、本多を構成する上で重要な要素であることは間違いない。ところが、清頭を助ける為に行動することによって揺らいだそれは、勲を救う為に行動することで崩された。これらの行為の原動力は「情熱」であり、「理智」「理性」はこれと反比例するかたちでなりを潜めた。二人によって「情熱」という原動力を得た本多は、二人を助け、救うことを一番の目的としている。つまり、清頭と勲の二人は、彼らの持つ「運命」と「情熱」とで自身を助け、救う〈救い手〉を創り出したと言えるだろう。

〈救い手〉を作り出したのは、清頭と勲が持つ「運命」であり、それぞれが燃やした「情熱」であった。しかし、二人の燃やした「情熱」は、本多に「いつはりの情熱」と「奇妙な情熱」という別の「情熱」を宿すことになった。この違いが生じた要因を、清頭と勲の違いに求めるのは自然なことである。そして、清頭と勲二人の違いとは、「情熱」の種類の違いであった。清頭の「情熱」は聡子への恋によって燃やした「恋の情熱」。勲の「情熱」は天皇への一見罪とも思えるような一方的な「忠義」を見せるという「忠義の情熱」であった。

このように、種類の違う「情熱」によって、本多の「情熱」の種類にも変化が現れた。今後は、「奔馬」で宿った

「情熱」が「暁の寺」「天人五衰」でも本多に宿り続けているのか。また、本多の「理智」「理性」はどうなっていくのかについて整理、考察していきたいと考えている。

注

- (注1) 吉田達志『三島由紀夫の作品世界―『金閣寺』と『豊饒の海』―』高文堂出版社 二〇〇三年五月 一〇三頁
- (注2) 田中美代子『『豊饒の海』論』『日本文学研究資料叢書 三島由紀夫』有精堂 一九七五年七月 一六三頁
- (注3) 田坂昂『三島由紀夫入門』オリジン出版センター 一九八五年十二月 一五七頁
- (注4) 前掲 吉田達志『三島由紀夫の作品世界―『金閣寺』と『豊饒の海』―』一一二頁

なお、テキスト本文の引用は、『三島由紀夫全集 決定版』第十三卷（二〇〇一年十二月）に拠った。